

グラナダ王国の征服

——降伏文書の検討を中心として——

林 邦 夫

(1983年10月12日 受理)

The Conquest of the Kingdom of Granada: An Inquiry into the Capitulations

Kunio HAYASHI

スペイン中世が、イスラム教徒によって征服された領土を再征服するという運動（レコンキスタ Reconquista）によって貫かれていたことは周知の所であろう¹⁾。レコンキスタは、13世紀半ば頃までにはグラナダ王国のみを残すところまで進展し、グラナダ王国はカスティーリャに貢納を送ることによって、緊張を孕みつつも、その独立を保っていた²⁾。

カトリック両王時代には、カスティーリャ女王イサベル1世とアラゴン王フェルナンド5世が婚姻していたという事情により、たとえそれが王冠の合体にすぎなかったとはいえ、イベリア半島に、ひとつの巨大な政治的統合体が現出した。かかる政治的統合体が半島内での覇権確立を目指して他の政治勢力との確執に入っていくのは当然の成行であった、といえよう。かかる一般的傾向がレコンキスタの伝統と結びつくとき、グラナダ王国の征服が日程に上ってくることになる。

本稿は、カトリック両王の対外政策分析の一環としてグラナダ王国の征服を取上げ³⁾、その具体的経過を明らかにするとともに、降伏文書（capitulaciones）の検討を通してカトリック両王による征服後の統治の基本的性格を指摘することを目的としている。

さて、カスティーリャ王位継承をめぐる内紛のため、イサベルとフェルナンドは差当りはグラナダと事を構える余裕はなく、1475年6月に1年間の休戦協定を結び、それが切れる1476年6月20日に、5年間の休戦協定が結ばれたが、双方の側からの越境侵入があり、結局1478年1月17日に3年間の休戦協定が締結された⁴⁾。しかし、これはグラナダ側からの攻撃によって破られ、ここにグラナダ征服戦争の火蓋が切られたのである。そこで次にグラナダ征服戦争の経過を概観していこう。

〔略語表〕

- | | |
|-----------|---|
| Pulgar | Hernando del Pulgar, <i>Crónica de los señores Reyes Católicos</i> , en BAE, t. LXX, Madrid, 1953. |
| Palencia | Alonso de Palencia, <i>Guerra de Granada</i> , en BAE, t. CCLXVII, Madrid, 1976. |
| Bernáldez | Andrés Bernáldez, <i>Memorias del reinado de los Reyes Católicos</i> . Ed. y estudio por M. Gómez-Moreno y J. de M. Carriazo, Madrid, 1962. |
| Historia | <i>Historia de los hechos de Don Rodrigo Ponce de León, marqués de Cadiz</i> , en CODICIN, CVI. |

- Zurita Jerónimo Zurita, *Anales de la Corona de Aragón*, t. 8, Zaragoza, 1977.
 BAE Biblioteca de Autores Españoles
 CODIN *Colección de documentos inéditos para la historia de España*, 112 tomos, Madrid, 1842-1896 rep. Nendeln, 1964-1966.

- 1) レコンキスタについての最近の標準的な研究として, D.W. Lomax, *The Reconquest of Spain*, London & New York, 1978 がある。
- 2) グラナダ王国についての最近の総合的研究として, R. Arié, *L'Espagne musulmane au temps des Nasrides (1232—1492)*, Paris, 1973; M.A. Ladero Quesada, *Granada. Historia de un País islámico (1232—1571)*, Madrid, 1978² が, また近年の研究動向の紹介として, Id., “La investigación histórica sobre la Andalucía medieval en los últimos veinticinco años (1951—1976)”, en *Actas I Congreso Historia de Andalucía. Andalucía Medieval*, tomo I, Córdoba, 1978, pp.243-249 がある。
- 3) 筆者は, カトリック両王の対外政策研究の一環として, 既に対ナバラ政策を扱った。拙稿, 「カトリック両王の対ナバラ政策」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』第33巻, 1981年。
- 4) J. Torres Fontes, “Las relaciones castellano-granadinas desde 1475 a 1478”, *Hispania*, 22, 1962; J. de M. Carriazo, “Historia de la Guerra de Granada”, en *Historia de España*, t. XVII (1), 1969, pp. 409-418.

I

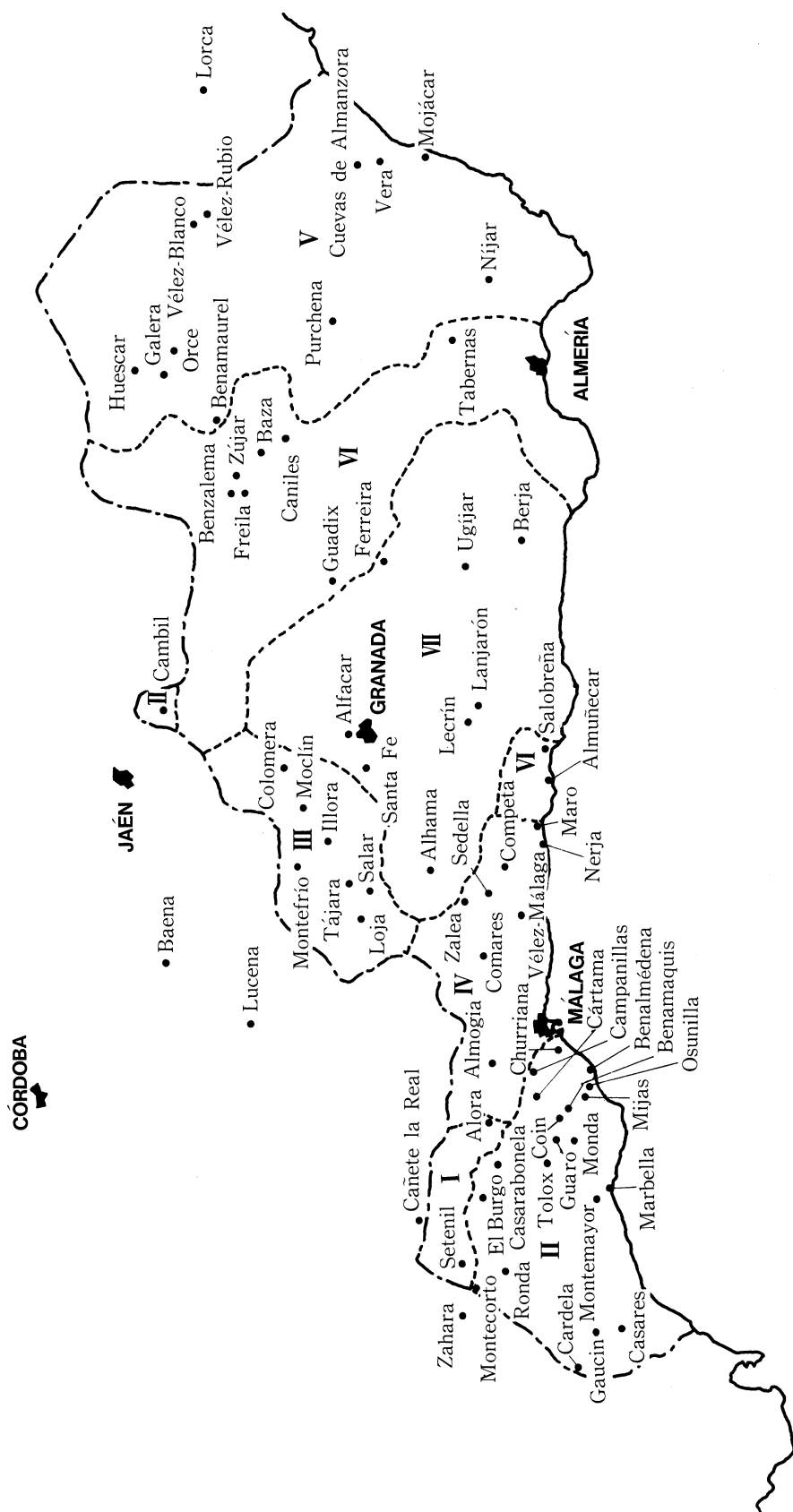
叙述の便宜のために, 4 期に分けて戦争の経過を辿っていくことにする¹⁾。

[1] 1482—1484年

グラナダ戦争は, 1481年12月27日, グラナダ側がサアラ (Zahara) を攻撃・占領し, 城代を殺害, 住民を捕虜とした事件によって開始された²⁾。1482年1月12日付のカトリック両王のセビーリャ市参事会宛書簡は, サアラ陥落が, 今まで実行すべきだと考えていたことを直ちに実行に移す機会を与えた, すべての地方でモーロ人に対する戦いの準備が整えられ, 唯サアラが奪回されるのみでなく, 他の町々も獲得されるよう望む, と述べて, 予てから考えていたグラナダ王国の征服にとりかかる決意を伝えている³⁾。サアラ占領に対する報復として, 1482年2月28日, カディス侯を中心とするアンダルシア貴族とセビーリャ市の軍隊がアルアマ (Alhama) の攻撃を開始, これを占領し, モーロ人の男 800 人を殺害し, 少数の逃亡者を除く残り 3,000 人を捕虜とした。イスラム側はアルアマの奪還を図るべく, 3月・4月・7月と攻撃を繰返すが失敗し, かくしてキリスト教徒側はグラナダ王国内部に橋頭堡を築くことに成功した⁴⁾。このアルアマへの補給を確保すべく, 国境とアルアマとの中間地点ローハ (Loja) の奪取を狙い, 6月末に攻撃が開始され, 7月1日にはフェルナンドがコルドバを進発してローハ近傍に陣を布くが, モーロ人の救援があり失敗に帰する⁵⁾。10月にはイスラム側が, 防備の手薄となった隙をついてカニェテ=ラ=リアル (Cañete la Real) を襲撃し, 婦女子・老人を捕虜として町を災上させ⁶⁾, 一方, キリスト教徒側も12月末にカディス侯がセテニール (Setenil) を攻撃する⁷⁾ など, 双方の側から互いに攻撃が加えられた。

ところで当時のグラナダ王国 (ナスル朝) の支配者はムレイ・アセン (Muley Hacén, イスラ

〈図〉グラナダー王国の征服過程



I	1484年	V	1488年
II	1485年	VI	1489年
III	1486年	VII	1490-1491年
IV	1487年		

[資料] Carriazo, *op. cit.*, p. 680 の図をもとに作成

ム名 Abū-l-Hasan ‘Ali) であったが、彼は掠奪されてきたキリスト教徒の女ソラーヤ (Zoraya, Isabel de Sólís) に寵愛を移していたため、妻ファーティマ (Fátima) とその息子ボアブディル (Boabdil, イスラム名 Abū ‘Abd Allah) との間が険悪化していた。ボアブディルは幽閉されていたグラナダを、1482年7月14日に脱出し、グワディシュ (Guadix) へと逃亡するが、間もなくグラナダで反乱が勃発し、ムレイ・アセンが追放され、ボアブディルがムハンマド11世⁸⁾として国王に推戴された。ムレイ・アセンは弟のサガル (El Zagal, イスラム名 Abū ‘Abd Allah Muhammad) と共にマラガへ退き、復位の機会を窺うことになる。

グラナダ王となったボアブディルは、1483年4月、カスティーリャ王国内に侵入、ルーケ (Luque), バエナ (Baena) を略奪し、ルセーナ (Lucena) へ向かったが、ここでの戦闘でカブラ (Cabra) 伯などの軍隊に敗れ、捕虜となってしまう⁹⁾。フェルナンドは6月にタハラ (Tájara) を陥落させ、すべてのモーロ人を捕虜とし、財産・糧食・武器・馬を奪い、町に火に放ち、城壁を破摧した後¹⁰⁾、同月30日にコルドバに帰還、ボアブディル側と折衝を行ない、ボアブディルによる①カトリック両王への臣従、②毎年12,600ドブラ (doblas) の貢納の献上、③400人のキリスト教徒捕虜の解放など、を内容とする協定を結び、これによってボアブディルは9月末か10月初めに釈放され、グラナダ王国内へ戻った¹¹⁾。こうしてカトリック両王はグラナダ王国内に有力な同盟者を獲得したのである。

1483年10月28日、カディス侯はサアラを奪還し、国王からカディス公・サアラ侯の称号を下賜されたが¹²⁾、1484年6月にはフェルナンドが自ら大軍を率いてコルドバから遠征の途に上り、8日間の攻囲の末に同月18日に、アローラ (Alora) を降伏させ¹³⁾、9月6日にセテニールの攻撃を開始、20日にこれを降伏させるという戦果を収めた¹⁴⁾。

グラナダではボアブディルが捕虜となったため、ムレイ・アセンが復位していたが、これによってイスラム側の結束が強まることを恐れたフェルナンドは、既述の如くボアブディルを釈放して、イスラム側の分裂を図る。しかし1483年10月17日付のグラナダのファキーフ (法学者) のファトワー (法的意見) が、ボアブディルは「内乱の火を放ち、ムスリムの心の裡に敵意と憎悪の種を播き、協和を破壊した」と糾弾している¹⁵⁾ことが端的に示すように、ボアブディルのグラナダ王国内での地歩は必ずしも強固だった訳ではなく、1485年2月にはサガルがボアブディル陣営側の都市アルメリーアを占領し、これによってボアブディルは3月初め、カスティーリャ王国への逃亡を余儀なくされる。

[2] 1485—1487年

1485年3月末、フェルナンドはコルドバから遠征に出発し、4月ベナマキス (Benamaquis) を武力征服した。ここは以前に臣従を申出て受入れられたが、フェルナンドが去った後に叛旗を翻したために再び攻撃が加えられ、攻囲中にキリスト教徒捕虜を殺害したこともあって、モーロ人108人が斬殺・絞首され、残りすべてが捕虜となり、町は焼払われ、城壁は破壊されたのである¹⁶⁾。次いでコイン (Coin) にベナマキスの奪取を伝えて降伏を勧告するが、肯じず防戦したため攻囲して降

伏に迫込み、町を破壊した¹⁷⁾。間もなくカルタマ (Cártama) も降伏を受入れるが¹⁸⁾、コイン、カルタマの攻囲中に、チュリアーナ (Churriana)、カンパニーリャス (Campanillas)、グワロ (Guaro)、など七つの町のモーロ人が攻撃を恐れて逃亡したため、キリスト教徒側はこれらの町の塔・城壁・農地を破壊した¹⁹⁾。5月8日には、ロンダ (Ronda) の攻囲が始まり、22日に降伏²⁰⁾、引続きモンテコルト (Montecorto)、カルデーラ (Cardela)、ガウシン (Gaucín)、カサーレス (Casares)、トロクス (Tolox)、エル＝ブルゴ (El Burgo)、モンダ (Monda) なども降伏した²¹⁾。カサラボネーラ (Casarabonela) の場合は降伏の事情がやや詳しく判明する。すなわち、フェルナンドはカサラボネーラに使者を派遣して降伏を勧告したが、これに対してモーロ人側は「陛下が、カサラボネーラのモーロ人が降伏した場合は、彼らの望むことを許そう、と語られたことを我々は承りました。……陛下に敬事することが我々にとって妥当であります」といった旨の降伏受諾の書簡をフェルナンドに送り、6月2日に引渡しが行なわれたのである²²⁾。マルベリーヤ (Marbella) の場合は、リバデオ (Ribadeo) 伯が降伏の交渉にあたり、これを受諾させたが²³⁾、それを知ってモンテマヨル (Montemayor) など近傍の13の町々も降伏するに至る²⁴⁾。その後軍勢はミーハス (Mijas) とオスニーリャ (Osunilla) に向かいこれを降伏させ、ベナルメデナ (Benalmédena) を破壊し、マラガに近づくが、兵力の疲弊や糧食不足のために攻囲は断念し、帰還の途についた²⁵⁾。

コルドバで兵を養った後、9月にはハエン攻撃の拠点となっていた河を挟む二つの城砦カンビル (Cambil) とアルアベル (Alhaber) を攻撃して、23日に降伏させたが²⁶⁾、1485年には、こうした国王の主力軍の動きとは別に、アルアマが単独で兵を繰出してサレア (Zalea) を実力で奪取し、モーロ人全員を捕虜にしている²⁷⁾。

一方、イスラム側の情勢を見ると、ボアブディルからのアルメリーアの奪取、アルアマ補給部隊の壊滅などの戦功で声望を高めていたサガルが兄のムレイ・アセンに代わって、ムハンマド12世として即位、ムレイ・アセンは間もなく没した。これによってイスラム側の結束強化を危惧したフェルナンドは、恐らく1483年のコルドバ協定と同じ条件で再びボアブディルのグラナダ王国への帰還を許した。ボアブディルは王国の東部を手中に収め、この勢いに乗じて1486年3月9日、ボアブディルの党派がグラナダで蜂起して市街戦となったが、5月19日すぎには内紛によってキリスト教徒との戦いが不利になることを恐れたファキーフ達の仲介によって妥協が成り、サガルはアミールの称号を保持してマラガ、グラナダ、アルメリーアを含む王国の西部を、ボアブディルは王国の東部を夫々実質的に支配することになった。

1486年4月末からの遠征では、5月28日にグラナダ平野 (Vega de Granada) へ進出するための要衝の地であるローハを降伏させ、キリスト教徒捕虜140人を解放したが、ここを守備していたのがボアブディルであり、彼は再び捕虜となった²⁸⁾。キリスト教徒側は、5月30日にローハ、アルアマ間のサラル (Salar)²⁹⁾、6月8日にイリョーラ (Illora) を降伏させ、後者では11人のキリスト教徒捕虜が解放され³⁰⁾、6月17日にはカディス公の仲介でモクリン (Moclín)³¹⁾ が、また同日中にモンテフリーオ (Montefrío)、コロメーラ (Colomera) が次々に降伏していき、前者では26人の捕

虜が自由の身となった³²⁾。

ところで、捕虜となったボアブディルとは、①ボアブディルはカトリック両王に臣従する、②ボアブディルが5月29日より8ヶ月以内に、バーサ (Baza)、ベーラ (Vera)、ベレス＝ブランコ (Vélez-Blanco)、ベレス＝ルビア (Vélez-Rubia)、モハカル (Mojácar) を含む地方を服属させるなら、両王はそれらの地方を、伯或いは公の称号とともにボアブディルに恵与する、という内容の協定が結ばれた³³⁾。ボアブディルは7月半ばにはベレス＝ブランコに入ったが、バーサ、グワディシュ、アルメリーアはサガル側につき、情勢はボアブディルにとって不利であった。しかしボアブディルは9月半ばには、グラナダの郊外区アルバイシン (Albaicín) に入ることに成功し、以後そこを拠点としてサガル側と対峙していくことになる。

1487年4月上旬にコルドバを進発した遠征軍は、16日にベレス＝マラガ (Velez-Málaga) に到着・攻囲し、5月3日にはシフエンテス (Cifuentes) 伯の交渉によって降伏させ、100人の捕虜を解放した³⁴⁾。ベレス＝マラガの降伏によって、アルモヒア (Almogia)、コマーレス (Comares)、セデーリャ (Cedella)、コンペータ (Competa)、マール (Maro)、ネルハ (Nerja) など多くの町々が降伏を受入れた³⁵⁾。遠征軍は、5月7日にはマラガに到着し、攻囲戦に入り、海上からの船隊による攻撃も加えられ、攻囲は長期に及び、モロ人側もヒブラルファロ (Gibralfaro) 城代のセグリ (Hamet el Zegrí) を中心とする抗戦派と、富裕商人のドルドックス (Alí Dordux) を中心とする和平派とに分裂したが、結局後者が優位を占め、3ヶ月の攻囲の後に、8月3日降伏するに至ったのである³⁶⁾。これによってミーハス、オスニーリャといったマラガに軍勢を送っていた町も砲撃され、降伏した³⁷⁾。

時期は遡るが、サガルはベレス＝マラガ攻囲を知り、4月19日にグラナダを出発して援助に赴くが、結局ベレス＝マラガが陥落したためアルメリーアへと撤退した。ボアブディルはサガルの不在の隙をついて4月29日にグラナダ全市を掌握、これを同日付の書簡³⁸⁾でカトリック両王に知らせるとともに、使者を派遣して、全11箇条から成る新たな協定を結んだ³⁹⁾。それは、①ボアブディルは可能となったときはいつでもグラナダとその城砦を引渡す (第1条)、②ボアブディルはグラナダ引渡し後に、彼に帰服しているすべての市町村・城砦を引渡す (第2条)、③カトリック両王はグワディシュ、バーサ、ベーラ、ベレス＝ブランコ、ベレス＝ルビオ、モハカル、プルチエーナ (Purchena) 谷などをボアブディルに恵与する (第3条)、④両王はアルバイシンの住民がムデハル (mudéjares, キリスト教徒支配下のイスラム教徒) として居住し続けることを許し、10年間の免租を保証し、メスキータを存続させる (第8条)、を主な内容としている。ボアブディルのグラナダ征圧により、グラナダ王国は、ボアブディルがベレス＝ブランコ、ベレス＝ルビオ、ベーラ、グラナダなどを、サガルがバーサ、グワディシュ、アルメリーアなどを領する形勢となり、1488年を迎えることになる。

[3] 1488—1489年

1488年6月7日、フェルナンドのロルカ (Lorca) 到着をまって当地に集結していた軍勢が進発し、

10日にベーラ, クエバス (Cuevas de Almanzora), 13日にモハカル, 20日までにベレス=ブランコ, ベレス=ルビオ, ニハル (Níjar), ウエスカル (Huescar), ガレーラ (Galera), オルセ (Orce), ベナマウレル (Benamaurel) など45に上る町々が次々に降伏していった⁴⁰⁾。これらの地域はボアブディルに帰服していたが, 敢えてそれをフェルナンドが征服した所以は, 1487年協定の大前提であるグラナダの引渡しはまだ実現されておらず, ボアブディルの動向に不安があったためであろう。

1489年になると, 今度はサガルに帰服していた地域に攻撃の鋒先が向けられた。同年5月ハエンに集結した軍勢を率いてフェルナンドは遠征に向かい, まずスハル (Zújar) を降伏させ⁴¹⁾, 次いでフレイラ (Freila), ベンサレマ (Benzalema) が降伏し, カニーレス (Caniles) では住民が逃亡した⁴²⁾。6月中旬にはバーサ攻囲が始まり, サガルは従兄弟の Yahya Alnayar を増援に差向けて抗戦させるが, 5ヶ月の長期に亘る攻防戦の末, 11月28日にバーサは降伏し, 12月4日に引渡しが行なわれ, 510人のキリスト教徒捕虜が自由を得た⁴³⁾。バーサに続いて, プルチェーナ, タベルナス (Tabernas) などが降伏を受入れた⁴⁴⁾。バーサ降伏後, サガルはカトリック両王側の説得に応じ, アルメリーアとグワディシュの引渡しを決断し, 22日にアルメリーアで両王を出迎え⁴⁵⁾, 30日には両王に随伴してグワディシュに行き⁴⁶⁾, 両市の引渡しを行なった。グワディシュ引渡し後に, アルムニェカル, サロブレニャ (Salobreña) も, グワディシュと同じ条件で降伏を申出た⁴⁷⁾。

こうしてサガルは完全にカトリック両王の軍門に下るのだが, 両者の間には既に12月10日付で全12箇条から成る協定⁴⁸⁾が結ばれていた。主な内容は, ①サガルは, 12月3日から20日以内に臣従し, それから70日以内に彼に従っているすべての市町村・城砦を引渡すこと(第1条), ②アルメリーアを引渡すこと。これに対し両王はサガルにアンダラクス (Andarax, アルメリーア近辺の地方), レクリン (Lecrín), ランハロン (Lanjarón) の諸地方と, そこからの収入, 及びラ=マアラ (La Mahara) の塩税の半分を恵与する(第2条), ③アルメリーア引渡し後, 2万カステリャーノをサガルに恵与する(第3条), ④サガルに対して王国内の如何なる土地での居住も許し, そのために安全保証状を与える(第4条), ⑤サガルの所領へのキリスト教徒の立入りを禁ずる(第5条), ⑥サガルはいつでも全財産をもってアフリカへ移住してよい。その場合には無償で船を提供する(第6条), ⑦キリスト教徒捕虜の身代金をサガルに支払う(第7条), ⑧サガルとその親族がグラナダ市内にもつ財産は免租される(第8条), ⑨サガルやその親族の馬と武器(火器は除く)の所有を保全する(第9条), ⑩アフリカ移住の場合は, 残していく土地や塩税収入の代償として3万ドブラを与える(第10条), である。また Yahya Alnayar とフェルナンド との間にも, 12月25日付で全7箇条から成る協定⁴⁹⁾が結ばれたが, その主な内容は, ①フェルナンドは Yahya Alnayar を保護下に受入れ, 王国の大諸侯と同様に遇する(第1条), ②彼の改宗の希望を密かに叶える(第2条), ③彼の所有するブドウ畑・城砦などを保全する(第3条), ④彼とその子孫に対してアルカバレーラなどの租税を免除する(第5条), ⑤20人の武装兵の維持を許す(第6条), である。

こうしてサガルと Yahya Alnayar が帰服した今, ボアブディルの去就が問題となってくる。

ボアブディルに帰服していた地域が1488年にカトリック両王によって征服されたことで、両者の関係が悪化することはなかった。1488年11月8日付のボアブディルのカトリック両王宛書簡⁵⁰⁾は、イサベルがボアブディルに恵物と賜金を送ったことに大いに謝辞を述べ、「私は両陛下の名誉のために私の人民と生命とを献げ、両陛下に対する奉仕を怠ることはないであります」と誠実を尽す意志を披瀝している。1489年のサガルの敗北・服従は、1487年協定が実現される条件を整えた、といってよい。おそらくカトリック両王は協定の中心的項目であるグラナダの引渡しをボアブディルに強く迫ったに違いない。1490年1月22日付のカトリック両王宛のボアブディルの書簡⁵¹⁾には、グラナダ城代のムレー (Abūl-Casīm el Muleh) が両王の宮廷から、両王側の2人の城代を伴って戻ったことが記されており、またボアブディルは同書簡で「余に命じられたことを果たす用意がある」と述べているが、これは2人の城代が両王の代理としてボアブディルにグラナダ引渡しの命令を伝え、それを受けてボアブディルが引渡しを実行する意志を表明したものである、と解釈される。その後の交渉経過の詳細は不明であるが、ボアブディルが結局は引渡しを拒否したか、或いは彼の優柔不断な態度に業を煮やしたカトリック両王が武力征服を決断したか、ともかくも1490年5月にはキリスト教徒側はグラナダ平野に侵攻し、いくつかの砦を奪うという挙に出た。

ところでサガルはアンダラクスなどの所領を与えられたが、その支配は徹底せず、ムデハルがグラナダと呼応して反乱を起こす危険があったため、1489年協定を利用して北アフリカに移住してしまった。その後1490年9月にボアブディルはサガル移住によって空白となったアンダラクス、ブルチェーナにまで勢力を拡大していき、カトリック両王との軍事的衝突が不可避となる。1491年4月7日、フェルナンドは軍勢を率いて親征に出発、4月末か5月初めにグラナダ市攻略の拠点としてサンタ＝フェ (Santa Fe) の町の建設を開始、攻囲は長期戦の様相を呈するが、フェルナンドは国王秘書サフラ (Fernando de Zafra) を通じて、ボアブディル側のムレーやグラナダ市長官のアベン・コミーハ (Yūsuf Aben Comixa) などと交渉を続け、11月25日に降伏協定を結んだ。またこれとは別に同日付でカトリック両王とボアブディル個人との間で、全16箇条から成る協定⁵²⁾が取交された。主な内容を見ていくと、①ボアブディルは65日以内に、グラナダ市の城砦・門・塔を引渡すこと。両王に「誠実と信義の順守」を誓うこと。城砦の補修に要する10日の間500人の人質を差出すこと。以上を行なえば、両王はボアブディルやその他の者を王権の「保護と安全と庇護」の下に受入れ、家・農地・動産・不動産を保全する(第1条)、②ボアブディルに、ベルハ (Berja)、アンダラクス、フェレイラ (Ferreira)、ウヒハル (Ugíjar) など12の地域を恵与する(第3条)、③3万カステリャーノをボアブディルに恵与する(第4条)、④ボアブディルがグラナダ市やアルプハラ山地に有しているすべての世襲地やオリーブ搾油場などを保全する(第5条)、⑤ボアブディルの母、妻、姉妹などがグラナダ市とアルプハラ山地に有する耕地・粉ひき場・浴場などを保全する(第6条)、⑥ボアブディルやその女系親族の世襲地は免祖とする(第7条)、⑦海外移住を許し、その場合には2隻のカラーカ船を無償で供与し、火器を除くすべての財産の搬出を許す(第11条)、⑧移住の際、土地を売却できなかった場合は、代理人を残して収入を徴収させてよい(第12条)、⑨ボア

ブディルはグラナダ市を退去したら、何れの地に居住してもよく、従者・城代・学者・カーディー（裁判官）などを伴って出発してよい。火器を除いて彼らから所有物が奪われることはない。彼らやその子孫はモロ人マーク着用を強制されない(第15条)、などとなっている。

降伏協定は結ばれたものの市内には抗戦論者も多かったため直ちに引渡しはなされた訳ではなく、1ヶ月以上経った1492年1月1～2日の夜、帰順派の手引で密かに入市したキリスト教徒側の軍隊が塔・砦などの軍事施設を掌握し、1月2日にカトリック両王が軍勢を率いて入市、ボアブディルが自らグラナダ市の鍵をフェルナンドに手渡すという象徴的行為によってグラナダ市の引渡しが行なわれた⁵³⁾。ここに、8世紀の長きに亘ったレコンキスタに完全に終止符が打たれたのである。

- 1) 研究者によるグラナダ戦争の記述で最も詳細なのは、おそらく、Carriazo, *op. cit.*, pp.387-914 であろう。しかしこれは、年代記史料からの長々とした引用がむやみに多く、戦争の概略的な経過を把握するには不適當である。なお、M. Garzón Pareja, *Historia de Granada*, I, Granada, 1980, pp.133-171 はこれを圧縮したものである。その他、T. de Azcona, *Isabel la Católica*, Madrid, 1964, Cap. IX; Arié, *op. cit.*, pp.147-178; J.N. Hillgarth, *The Spanish Kingdoms 1250-1516*, II, Oxford, 1978, Part III, Chap. II; A. de la Torre, *Los Reyes Católicos y Granada*, Madrid, 1946 などとも参看したが、最も有益であったのは、Ladero Quesada, *Castilla y la conquista del reino de Granada*, Valladolid, 1967, pp.19-68 であり、本稿の時期区分もほぼこれに依拠している。なお、トレの著書は、戦争の経過を辿った第1部と、ボアブディルとカトリック両王との関係を扱った第2部とから成るが、とくに後者が有益である。
- 2) Pulgar, [Parte] III, [Capítulo] I; Palencia, [Libro] I, 87; Zurita, [Libro] XX, [Capítulo] XLII, 409.
- 3) *El Tumbo de los Reyes Católicos del Concejo de Sevilla*, III. Ed. de la Universidad Hispalense dirigida por R. Carande y J. de M. Carriazo, Sevilla, 1968, p.193.
- 4) Pulgar, III, II; Palencia, II, 89-93; Bernáldez, [Capítulo] LII; Historia, [Capítulo] XV. 人数の数字はベルナルデスによる。
- 5) Palencia, II, 94-96; Zurita, XX, XLIV, 417-418. 以下、いちいち註記しないが、カトリック両王、とくにフェルナンドの動きについては、A. Rumeu de Armas, *Itinerario de los Reyes Católicos*, Madrid, 1974 を参照した。
- 6) Pulgar, III, X; Palencia, III, 99-100.
- 7) Historia, XVIII.
- 8) ナスル朝の王位については諸書において相違があり、例えば、アリエはボアブディルをムハンマド12世とし、サガルの王位を認めていない。Arié, *op. cit.*, Tableau N° 1. 本稿では、わが国の『イスラム事典』, 平凡社, 1982年, 440-441頁の系図に従った。
- 9) Pulgar, III, XX; Palencia, III, 103-105; Bernáldez, LXI.
- 10) Pulgar, III, XXII; Palencia, III, 108; Bernáldez, LXIII; Historia, XIX; Zurita, XX, LI, 448.
- 11) この協定の原文は残存していないが、その内容は1483年8月26日付のナポリ王妃フワナ宛のフェルナンドの書簡（原文は、*Documentos sobre relaciones internacionales de los Reyes Católicos*, I. Ed. por A. de la Torre, Barcelona, 1949, pp.333-335）の中で述べられている。これから、トレは協定締結の時期を8月中と推定している。ボアブディル釈放の時期については、1485年か86年とする説もあるが、トレは、キリスト教徒側のすべての年代記史料が1483年中の釈放で一致していることを根拠として1483年説をとり、更に具体的に9月末か10月初めを釈放の時期と推定しており、ここでもこれに従う。Torre, *op. cit.*, pp.142-159.
- 12) Pulgar, III, XXV; Palencia, III, 114; Bernáldez, LXVIII; Historia, XXII; Zurita, XX, LIV, 458.

- 13) Pulgar, III, XXXIII; Palencia, IV, 122; Bernáldez, LXXI; Historia, XXVII; Zurita, XX, LVIII, 472.
- 14) Pulgar, III, XXXIV; Palencia, IV, 130; Bernáldez, LXXIV; Historia, XXVIII; Zurita, XX, LX, 477.
- 15) F. de la Granja, "Condena de Boabdil por los alfaquíes de Granada", *Al-Andalus*, 36, 1971, p.159.
- 16) ここではプルガール (Pulgar, III, XLII, 413) に拠ったが、諸年代記の記述は相互に多少の相違がある。パレンシアは、モーロ人がキリスト教徒捕虜を殺したため、スペイン側が総力をあげて攻撃し、モーロ人の男の100人毎に20人を報復として殺した、と述べ、Historia は100人以上のモーロ人を斬殺・墜落死させた、ベルナルデスも100人以上のモーロ人を切刻んだ、と夫々述べている。Palencia, V, 142; Historia, XXIX, 243; Bernáldez, LXXV, 156.
- 17) Pulgar, III, XLII, 413-414; Palencia, V, 141-142; Bernáldez, LXXV, 156; Historia, XXIX, 243.
- 18) Pulgar, III, XLII, 415; Palencia, V, 143; Bernáldez, LXXV, 157; Historia, XXIX, 243. ベルナルデスは、ベナマキスとコインは破壊されたが、カルタマは城砦として存続した、と述べている。
- 19) Pulgar, III, XLII, 415.
- 20) Pulgar, III, XLIV; Palencia, V, 145-146; Bernáldez, LXXV, 157-160; Historia, XXIX, 244; Zurita, XX, LXII, 486. パレンシアは降伏を23日としている。
- 21) ロンダ降伏に誘発されて降伏した土地の地名は年代記史料によって出入りがある。プルガールはここで記した地名を含む12の地名を挙げ、同様に降伏したものとしてアラバル (Arrabal) 山地の19の町、ガウシン山地の17の町や属村、ビリャルエンガ (Villaluenga) 山地の12の町と属村を数のみで挙げている。Pulgar, III, XLV. パレンシアは、まずモンテコルトが降伏し、それにカルデーラなどが、倣ったと述べ、それから征服地の城代職の割当の報告の中で、カサーレス、ガウシンなど30の地名を列挙している。Palencia, V, 146-147. ベルナルデスは、カディス公を派して降伏を勧めた結果、それに応じたものとして、カルデーラなど六つの地名を挙げ更に使者を送って降伏を勧めた結果、カサーレス、ガウシンなどとベルメハ (Bermeja) 山地が降伏したとし、その後で降伏した土地の地名を今まで挙げた地名を含めて70列挙している。Bernáldez, LXXV, 160, 163-164. Historia は、モンテコルトを実力で奪取し、その他カルデーラなど六つが実力や協定で征服された、としている。Historia, XXIX, 245.
- 22) カサラボネーラ降伏について、書簡を掲げて詳述しているのは、プルガールとベルナルデスである。Pulgar, III, XLV, 421; Bernáldez, LXXV, 161-162.
- 23) Pulgar, III, XLVI; Palencia, V, 147; Zurita, XX, LXII, 497.
- 24) Pulgar, III, XLVI, 423.
- 25) Pulgar, III, XLVI, 423-424.
- 26) Pulgar, III, LI; Palencia, V, 163-154; Bernáldez, LXXVII; Historia, XXX; Zurita, XX, LXIV, 496.
- 27) Pulgar, III, LII; Palencia, V, 154; Bernáldez, LXXVII; Zurita, XX, LXIV, 496.
- 28) Pulgar, III, LVII-LVIII; Palencia, VI, 164-166; Bernáldez, LXXIX; Historia, XXXIII; Zurita, XX, LXVIII, 520.
- 29) Palencia, VI, 166.
- 30) Pulgar, III, LIX; Palencia, VI, 166; Bernáldez, LXXIX; Zurita, XX, LXVIII, 520. スリータは降伏を6月9日としている。
- 31) Pulgar, III, LXI; Palencia, VI, 167; Bernáldez, LXXXI; Historia, XXXVI; Zurita, XX, LXVIII, 521.
- 32) Pulgar, III, LXII; Palencia, VI, 168; Bernáldez, LXXXI; Historia, XXXVI; Zurita, XX, LXVIII, 521.
- 33) この協定の原文は現存しないが、その内容は、1486年5月30日付のフェルナンドのウベダ (Úbeda) 市宛の書簡の中で述べられている。この書簡の原文は、M. Garrido Atienza, *Las capitulaciones para la entrega de Granada*, Granada, 1910 [以下、*Capitulaciones* と略記], doc. V.
- 34) Pulgar, III, LXX-LXXIII; Palencia, VII, 178-182; Bernáldez, LXXXII; Historia, XLI; Zurita, XX, LXX, 527-528. 日付はベルナルデスによる。プルガールは4月27日としている。
- 35) Pulgar, III, LXXIII, 454; Palencia, VII, 182; Bernáldez, LXXXII, 176; Historia, XLII. プルガールは

- コマーレスなど五つの町が引渡され、次いで次の町々のモーロ人が臣民となることを申出たとして36の地名を列挙し、パレンシアは地名を挙げずに、12の町と56の城砦・属村が降伏したといい、ベルナルデスはコマーレスなど23の地名の一覧表を掲げており、Historia は、カディス公が降伏に関与したものとしてコマーレス、トロクスなど四つの地名を挙げている。
- 36) Pulgar, III, LXXIV-XCIV; Palencia, VI, 182-195; Bernáldez, LXXXIII-LXXXV; Zurita, XX, LXXI. 5月7日はベルナルデスによる。パレンシアは、5月2日を攻撃開始日としている。
- 37) Pulgar, XCIII, 471-472; Palencia, VI, 196; Bernáldez, LXXXVI. オスニーリャは、プルガールとベルナルデスではオスーナとなっている。なお、この二つの町は既述のようにプルガールでは1485年に降伏したことになっており、何故再びここに登場するのか不明だが、一応、降伏後に離反した、と解しておく。
- 38) 原文は、CODAIN, LXXXVIII, 496-497; *Capitulaciones*, doc. VII.
- 39) 原文は、*Capitulaciones*, doc. IV. ガリド＝アティエンサは、この協定の年代を、ローハでボアブディルが捕虜となった事件に関連づけて、1486年5月としているが、トレは、1487年5月としており、ここではトレ説に従う。Torre, *op. cit.*, pp.193-197.
- 40) 以上は、パレンシアの記述に拠る。Palencia, VIII, 206, 209. ベルナルデスは降伏した土地としてベーラ、ニハル、ベナマウレス、オルセなど49の地名のリストを示している。Bernáldez, LXXXIX, 202. Historia はカディス公のイサベル宛書簡を利用して、ベーラ、モハカル、ニハル等々が降伏していく経過を記した後に、ベーラ他50余りの町・村・城砦が降伏した、とまとめている。Historia, LI, 301-310. スリータには、6月10日にベーラとクエバスが、それから10日以内にモハカルとベレス＝ブランコ、ベレス＝ルビオが降伏した、とある。Zurita, XX, LXXV, 546.
- 41) Pulgar, III, CV; Palencia, IX, 222; Bernáldez, XCII, 206.
- 42) Palencia, IX, 227.
- 43) Pulgar, III, CXXI-CXXIV; Palencia, IX, 222-236; Bernáldez, XCII; Zurita, XX, LXXXI, 566-567. なお、バーサ攻撃についての研究として、Ladero Quesada, *Milicia y economía en la Guerra de Granada: El cerco de Baza*, Valladolid, 1964 がある。
- 44) Palencia, IX, 236. プルガールでは、プルチェーナ、タベルナス、アルプハラ (Alpujarra) 山地、アルムニェカル (Almuñecar) が降伏した、となっている。Pulgar, III, CV, 502-503.
- 45) Pulgar, III, CXXIV, 503; Palencia, IX, 236-238; Bernáldez, XCIII; Zurita, XX, LXXXI, 567.
- 46) Pulgar, III, CXXV; Palencia, IX, 238; Bernáldez, XCIV.
- 47) Pulgar, III, CXXV, 504.
- 48) 原文は、*Capitulaciones*, doc. XIV; Ladero Quesada, *Los mudéjares de Castilla en tiempo de Isabel I*, Valladolid, 1969 [以下、*Mudéjares* と略記], doc. 28.
- 49) 原文は、CODAIN, VIII, 407-411; *Mudéjares*, doc. 29.
- 50) 原文は、*Capitulaciones*, doc. IX.
- 51) 原文は、*Capitulaciones*, doc. XXII.
- 52) 原文は、CODAIN, VIII, 411-420; *Mudéjares* doc. 49; *Capitulaciones*, doc. LIX. 前二者は、Simancas 文書館所蔵の原文に拠っており、*Capitulaciones* は、Zafra 家文書の中の原文とこれとを対比的に活字化している。両者間に大きな差はないが、前者では後者の第3条の末尾部分と第8条全体が欠如している。
- 53) Bernáldez, CII; Zurita, XX, XCII; A. de Santa Cruz, *Crónica de los Reyes Católicos*, tomo I. Ed. y estudio por J. de M. Carriazo, Sevilla, 1951, Parte I, Capítulo IV. グラナダ降伏についての諸史料の記述相互間の日付についての相違を、1月8日付の Cifuentes なる者のレオン司教兼バリャドリ高等法院総裁 Alonso de Valladolid 宛の書簡に基づき、1月1～2日夜の事実上の占領、2日の公式の降伏という形で解決した論文として、M. del Carmen Pescador del Hoyo, "Cómo fué de verdad la toma de Granada a la luz de un documento inédito", *Al-Andalus*, 20, 1955 がある。

II

以上、グラナダ戦争の経過を年代記史料に拠りつつ辿ってきたが、それではかくしてカトリック両王の支配下に組込まれた旧グラナダ王国に一体如何なる統治が布かれていくことになるのか、次にこの問題を考察していきたい。

キリスト教徒側が、グラナダ王国の各地域を征服していった方法は、大別して二つあった、といえる。第一は、奇襲攻撃や攻撃前のモーロ人の退散によって、或いはモーロ人が最後まで抵抗したために和平の交渉がなされぬままに、キリスト教徒側が武力のみによって征服を行なった場合であり、第二は、攻囲に至らぬ前にモーロ人側からの申出で、或いはキリスト教徒側からの勧告に応じて、モーロ人が降伏したり、攻囲後にやはり同様の形で降伏したりするなどによって、ともかくも何らかの協定が結ばれ、それによって征服を行なった場合である。

第一の場合は、極めて僅かであり、アルアマ、タハラ、ベナマキス、サレアの4例を数えるにすぎない。これらの場合には、モーロ人は殺されるか捕虜になるかの何れかで、勿論財産は没収され、町は破壊・災上させられたり、或いはキリスト教徒の城砦として引続き利用されたりしている。これらの地域にはモーロ人がいなくなるから、カスティージャの他地域の統治が、そのままの形で及ぼされてくるにすぎず、特に問題は生じない。

第二の場合は、これに反して、降伏協定が存在し、征服後の統治はこれに規定されることになるから、降伏協定の検討が必要となってくる。ところで、降伏文書の原文が残存している例は僅かであり、降伏協定の内容を知るには年代記史料の記述に依拠せねばならない場合が多い。すなわち、年代記が、モーロ人側からの降伏条件の要望、キリスト教徒側からの降伏条件の提示、征服後の実際の措置などを述べている部分から、降伏協定の内容を推測するのである。降伏条件と征服後の措置とは後出のミーハスとオスニーリャの場合のように、違っている例があるが、これは例外的であると思われ、またかかる場合にはそれが年代記に記述されている、と判断されるから、それらを除けば、同一視することが許されよう。従って以下では特にこれらを区別せず、内容のみが判る形で、年代記史料の関係部分をまず呈示していく。簡略化のため適宜省略した部分があり、また史料相互間で内容が重複する場合は、最も詳しいものを呈示し、それ以外の知見を与える他史料の関係部分を呈示して補う形にした。年代記史料は、Iと同じく、(A)プルガール、(B)パレンシア、(C)ベルナルデス、(D) *Historia*、(E)スリータ、を用い、引用の出所となった史料は、(A)～(E)の記号で引用文の冒頭に示した。なお、2例のみ年代記以外の史料を引用するが、これは(補)で示した。

(1) サアラ (1483年)

(B) 「モーロ人に生命 (vida) を恵み、アフリカへ自由に (libremente) に赴くことを許す」¹⁾

(C) 「モーロ人を自由に退去させる。運搬できる限りの所有物をもって行くことができるが、武器 (armas) は残す」²⁾

(補) 「〔アルアマの〕中にいるモーロ人はすべて自由であり、グラナダ王国やその他望む所へ行くことができ、自由人 (personas libres) として望むすべてを自ら行なうことができる」³⁾

(2) アローラ (1484年)

(A) 「モーロ人に生命と財産 (bienes) を保証し、彼らの望む如何なる所へも無事に送って行く」⁴⁾

(B) 「軽い行李をもって望む所へ赴く自由を与えた」⁵⁾

(E) 「運べる限りの衣類 (ropa) をもってモーロ人を退去させる」⁶⁾

(3) セテニール (1484年)

(B) 「モーロ人が望む所へ安全に (seguramente) 赴くことを許し、彼らに道中のために十分な護衛 (escorta) を約束した。同時に望むだけ多くの動産 (bienes muebles) を騾馬に乗せて運ぶことを許可し、そのために必要な場合には他の物をも提供することを申出た」⁷⁾

(C) 「彼らが所有物をもって去ることを許し、国王の軍隊とカディス侯に彼らをロンダまで送らせた」⁸⁾

(D) 「モーロ人に生命を許与し、自ら背負えるものを持って行くことを許す」⁹⁾

(E) 「モーロ人が残した小麦や食糧の代償として、また彼らが抑留していた捕虜の〔解放の〕ために、一定額の金を与え、運べるだけの衣類を持って行かせた」¹⁰⁾

(4) ロンダ (1485年)

(A) 「アフリカのモーロ人の王国やグラナダやその他の地方に行くことを望む者には、そうできるよう生命と財産を保証すること、カスティーリャ王国内の市・町に居住を望む者があれば、国王は彼らを受入れ、彼らが〔マホメットの〕教え (ley) を守ることを妨げられず、また危害を加えられずに遇されるよう命ずること。……ロンダの民政長官 (alguacil mayor) は、子や親族と共にセビーリャとアルカラ・デ・グワダイラ (Alcalá de Guadaya) への移住を要求した。国王・女王はこれを嘉し、彼らを受入れ丁重に遇するよう命じ、すべての貢納を免除した。また家屋を与えるよう命じ、パンなどの食糧を恵与した。その他の住民はロンダ山地に移住した。

また中には国王の安全保証状 (seguro) を携えてアフリカの王国へ渡る者もいた」¹¹⁾

(B) 「国王フェルナンドは、キリスト教徒捕虜の身代金 (rescate) としてモーロ人に6万ドブラ (doblas), またはドゥカード (ducados) を与えること。降伏者はすべての動産を選び出すことができること。モーロ人に戦いのない場所に肥沃な耕地と住居を指定すること。〔移動のときに〕あらゆる攻撃からモーロ人の安全を守り、十分に食糧を供与すること」¹²⁾

(C) 「国王はモーロ人が、所有物をすべてもって望む所へ赴くために15日間の猶予を与えた。その期間内にすべての者が出発し、或る者はモーロ人の領土へ、或る者はセビーリャ近傍のアルカラ・デル・リオ (Alcalá del Río) に来住した。後者はセテニールの城代とロンダの長官であり、国王は彼らが子や家族とともにアルカラに来るために駄獣を与えた」¹³⁾

(補) 「民政長官 Abraham Abhaquime ら〔モーロ人の人名が列挙されているが略す〕は、妻子・

財産とともに余らの王領や貴族領、とりわけセビーリャ市とその属域へ移住することを望んでいる。……彼らが全財産をもって余らの王領や貴族領の何処へでも安全に赴き居住でき、自由かつ安全に余らの王領・貴族領を移動でき、また彼らやその子孫が永久に上納金や人頭税 (serviço y medio serviço e cabeça de pecho) を免除されるために、彼らとその財産・妻子・子孫とそれらの者の財産を余らの保護と安全と庇護の下に受入れるのが余らの意志である」¹⁴⁾

(5) コイン (1485年)

(B) 「すべての降伏者が自ら運べるものをもって、町から出発することを許した。……間もなく大勢の者がマラガへの旅の途次に困ることのないよう十分な保護を嘆願し、これが与えられた」¹⁵⁾

(6) カルタマ (1485年)

(B) 「望む所へ自由に赴く許可をモーロ人に与え、道中の十分な安全と家財道具の運搬のための便宜とを提供した」¹⁶⁾

(7) カサーレス、エル＝ブルゴ、トロクスなど (1485年)

(A) 「モーロ人は国王・女王の誠実なる良き臣民・臣下 (buenos é leales súbditos é vasallos) となり、その令状と命令 (cartas é mandamientos) を遂行し、その命令によって戦争と講和を行ない、モーロ人王に与える慣例となっていたすべての貢納や租税 (tributos é pechos é derechos) を支払うこと。国王は彼らがマホメットの教えを守ることを妨げず……彼らの訴訟がカーディーの法廷において、Jaracuna の法に基づいて裁かれることを認める。また彼らが赴く、国王や領主の如何なる地でも、モーロ人の地との辺境にあるキリスト教徒の城砦に行かない限り、その身柄と財産が守られること」¹⁷⁾

(8) カサラボネーラ (1485年)

(A) 「国王は彼らに安全保証状を与えるよう命じた。町の人々は、国王・女王の臣民となり、モーロ人王に与えていた貢納を支払うことを誓い、間もなく城とすべての砦が引渡された」¹⁸⁾

(C) 「モーロ人がムデハルとして町に留まることを、国王は彼らと取決めた」¹⁹⁾

(E) 「モーロ人は国王の命令によって全財産をもってコインに移動した」²⁰⁾

(9) マルベアーリャ (1485年)

(A) 「国王はアフリカの地へ行くことを望む人々を安全に渡す船と兵士を供与するよう命じた」²¹⁾

(B) 「モーロ人は家と土地を放棄したが、運ぶのに容易な動産を保持し、運び去る許可を乞うた。勝利者はそれを与え、またモロッコへ渡るために必要な食糧と船をも与えた」²²⁾

(10) モンテマヨールなど (1485年)

(A) 「これらの町の人々は、国王の臣民となる義務を負い、国王に対して他の町の人々が行なった宣誓を行なった。国王は彼らに生命と財産の安全を保証した」²³⁾

(11) カンビルとアラバル (1485年)

(A) 「国王は城代とすべてのモーロ人に安全を保証した。翌日、城代がやって来て国王に別れを

告げ、すべてのモーロ人と共にグラナダーへ向かった」²⁴⁾

(D) 「内部にいたすべてのモーロ人を斬殺し、塔を破壊させた」²⁵⁾

(12) ローハ (1486年)

(A) 「市外に出るモーロ人すべての生命と財産の安全を保証すること。またカスティーリャ、アラゴン、バレンシアの諸王国で生活することを望む者があれば、安全にそうできること。この安全が保証されれば、彼らは市とキリスト教徒捕虜すべてとを引渡す」²⁶⁾

(B) 「住民は安全を保証されて自由に望む所へ赴くことができ、運べるだけのものを自らもって、或いは騾馬に乗せて運ぶことができる」²⁷⁾

(C) 「モーロ人はカディス侯によって、彼らをグラナダーまで送ってくれるよう国王に恵みを乞うた」²⁸⁾

(13) イリョーラ (1486年)

(A) 「国王は、モーロ人の人身と財産（残しておくよう命じた武器を除く）の安全を保証し、彼らはすべてのキリスト教徒捕虜を解放した。間もなく国王は彼らに安全保証状を与え、城代とモーロ人たちは町を引渡した。国王はグラナダーへの道を安全になる所まで、彼らを送って行くよう命じた」²⁹⁾

(14) モクリン (1486年)

(A) 「城代がやって来て、これらの町の住民とその財産のために安全を保証するよう懇願した。国王と女王は、彼らがすべての武器と糧食を残し、それらを除く財産をもってグラナダーへ行くために、安全保証状を与えるよう命じた」³⁰⁾

(15) モンテフリーオとコロメーラ (1486年)

(A) 「国王と女王はモーロ人たちの人身と財産の安全を保証した。モーロ人たちは町を出発した。町にはすべての武器と糧食を残し、捕われていたキリスト教徒を引渡した。国王と女王は、グラナダーへの道を安全となる所まで彼らを送るよう命じた」³¹⁾

(16) ベレス＝マラガ (1487年)

(A) 「国王は、市内にいるすべての人々がアフリカの諸地方やその他いずれの地へでも行くことができるために、彼らに安全保証状を与え、また彼らが、武器・食糧・大砲を除いて、財産を搬出できるよう取計らうことを命じた。彼らが国王や女王の臣民となり、その領土内に住むことを望むなら、それが海に近い所でなければそうできる。……国王は動産を売却するために6日間の猶予を〔退去する〕モーロ人に与えた。モーロ人は12人のキリスト教徒捕虜を国王に引渡した」³²⁾

(B) 「ベレス＝マラガの住民は望む所へ自由に赴くか、或いは近傍の農村にその他の敗者と同じ条件で留まることができる。捕虜は野営設定後30日以内に引渡さねばならない。市の降伏から6日以内に、運び去るか売却するかしてすべての動産を処分してよい」³³⁾

(17) マラガ (1487年)

- (B) 「身分・性別・年齢に関わりなく、すべての者が16ヶ月以内に1人当り36ドゥカードを身代金として支払うこと。……ドルドックスとその8人の親族には自由と全不動産・動産の所有と市内への残留が許された」³⁴⁾
- (C) 「すべてのモロ人は捕虜となる。しかし生命は全員に保証する。〔ドルドックス〕自らとその親族40家族は、ムデハルとして市内に自由に免租で留まってよいという許可を得た」³⁵⁾
- (18) ミーハス、オスーナ（オスニーリャ）（1487年）
- (B) 「住民たちは、わが軍隊に甚大な被害を与えてきたが、国王に過去の行為の赦免を乞うと、国王は寛大にそれを与えた。……降伏が締結されると前記の町々の住民はすべての動産を驛馬に乘せ妻子を連れてマラガの海岸へ下りてきた。彼らはモロッコの海岸へ運ぶのだからということで荷物をガレー船に載せるよう命じられた。しかし乗船が終わると、全員が奴隷であると申渡された」³⁶⁾
- (19) ベーラ（1488年）
- (B) 「家に留まることを望む住民には財産の自由な所有を許すよう命じ、触れ役の声によって彼らに少しでも危害を加えてはならぬことを周知させた。最後に動産をもって望む所へ自由に赴くために50日間の猶予を住民に与えた。彼らがアフリカを〔目的地に〕選んだときも然りで、その場合には、彼らに安全保証状と渡海のための船とを与えることを約束した」³⁷⁾
- (20) スハル（1489年）
- (A) 「国王は彼らに生命と自由を与え、彼らはすべての武器とともに町を放棄した。モロ人は自由に町を去り、バーサへ向かった」³⁸⁾
- (C) 「彼らは城砦と町を引渡し、運べる限りのすべての所有物をもって去る」³⁹⁾
- (21) バーサ（1489年）
- (A) 「第一に、市外から防守のために到来したすべての騎兵・歩兵は直ちに退去すること。彼らは、武器・馬とともに安全に家や、その他の望む所へ行くことができる。次にバーサ市内の居住者はすべて郊外へ移住すること。それを望まぬ者は、その他の欲する地方へ財産をもって安全に行くことができる。同じく郊外に居住者として留まる者は、国王と女王の誠実なる良き臣民となる誓いを行ない、その命令を遵守する。同じく彼らは、モロ人王に与える慣習であったすべての貢納・租税を国王・女王に支払うこと。国王・女王は彼らが誓いを守るならば、次の事柄を約束する。すなわち、彼らがマホメットの教えを守ることを妨げぬこと、彼らが裁かれ支配されるモロ人の法を使用することを許すこと、暴力・不正を加えたり加えることに同意しないこと、である。バーサは城郭と共に6日以内に国王・女王に引渡されること。同じ期間内にモロ人は市内に所有する全財産を搬出せねばならない。長官や主立った者の子息を15人人質として差出すこと」⁴⁰⁾

以上、21の地域の降伏条件について年代記史料を引用してきたが、まず(8)と(11)で史料相互間に矛

盾があることが目につく。(8)では(C)と(E)の間に矛盾があるが、(E)がやや後の時代の史料であるのに比して、(C)は同時代史料であり、また同じく同時代史料の(A)もとくにモーロ人の移動について記していないことから、ここでは(C)の方を採る。(11)では、(A)と(D)の間に甚しい食違いがあるが、引用はしなかったが(C)も(A)と同内容であることから、ここでは(A)の方を採る。以上の2例を除けば、史料相互の記述に矛盾はないといえるが、各事例相互の間には大小の相違があり、厳密に言えば一つとして同じ条件の地域はないともいえる。しかしこれを敗者たるモーロ人とカスティーリャ王権との関係という角度から見ると四つの類型に分類できる、と考えられる。まず分類の結果を示すと次の通りである。(1)～(21)の数字は上記の各地域の番号を示している。

[α]—(1), (2), (3), (5), (6), (9), (11), (13), (14), (15), (20)

[β]—(7), (8), (10)

[$\alpha \cdot \beta$]—(4), (12), (16), (19), (21)

[γ]—(17), (18)

これらの諸類型について、以下順次説明していく。

[α]—或る地域のモーロ人が敗北・降伏すれば、その地域がカスティーリャ王権の支配下に組込まれ、カスティーリャ王国の一部を形成することになることはいうまでもない。王国内の地域の住民は法的に言えば王権の支配に服さないことは一般にあり得ないから、征服された地域のモーロ人がその地に留まれば、国王の臣民たらざるを得ない。しかし、王国外へ去れば王権の支配に服す必要は当然なくなる。[α] はモーロ人が王国外に退去して、王権の支配に服さなかった場合である。

[α] の降伏条件を更に詳しく見ていこう。

まず王権はモーロ人に、①生命②自由③財産を保証する。①は例えばキリスト教徒側に被害を与えた報復として全員乃至一部のモーロ人の生命を奪うことはない、②は捕虜にはしない、ということをも夫々意味している。③は財産といっても国外に退去する者についてのことだから、不動産は含まれず、運搬可能な財産(動産)のみを含んでいる。①②について地域差はないが、③については様々なケースがあった、といえる。(2)(B)にあるように、行李に詰めて運んだのであろうが、その場合に人力のみに頼る場合や騾馬などの駄獣を利用する場合などがあったことは上記の史料から明らかだが、いずれにせよ、運搬手段の制約からすべての動産を運ぶことはできなかった場合が多かったものと推測される。その場合、(2)(E)にあるように衣類を中心とする身の回り品に限定される場合もあったであろう。また運搬手段の制約とは関係なく、そもそも搬出を禁じられたものもあった。武器と食糧がそれである。武器の搬出禁止の理由は、王国へ退去するモーロ人はいずれまたキリスト教徒側と干戈を交える可能性があり、かかる点から彼らの戦力を幾分でも殺ぐことが有益であったからであろう。食糧については、敵地に侵入してきているキリスト教徒軍にとって糧秣の補給は困難な問題であり、かかる意味からモーロ人が貯えていた食糧は絶好の獲得物であったからであろう。しかし、モーロ人が移住先に着くまでの期間に必要な食糧は適当に支給されたであろう。これらの食糧を戦利品として剝奪するのではなく、金銭を対価として与えている例—(3)(E)—があること

は、運搬のために駄獣の提供などの便宜を図っていることと併せて、キリスト教徒側の寛大さを示すものとして注目される。

モーロ人のカスティーリャ王国外の退去先は、北アフリカ（モロッコ）と領土の縮小しつつあるグラナダ王国とに大別できるが、後者の場合は、グラナダやマラガなどの近くの大都市が移住先となる場合が多かったことは、上掲の諸史料から確認できる。注目すべきは、キリスト教徒側が、前者の場合には船舶・食糧・護衛兵などを供与して渡航の便宜を図り、後者の場合には目的地近くまで護送したり、(4)(B)にあるように移住先の面倒まで見たり、道中の食糧の配慮をしたり、いずれも寛大で懇切な措置がとられていることである。

次にモーロ人側はキリスト教徒側に如何なる利益を与えたのか。第一に、降伏によってそれまでのモーロ人の支配地がカスティーリャ王国に併合されたことが挙げられねばならない。これは同時に〔 α 〕の場合には、モーロ人の国外退去によって残された城砦・不動産（家屋・耕地など）がキリスト教徒の所有に帰することを意味している。第二に、キリスト教徒捕虜の解放がある。キリスト教徒捕虜は辺境での戦闘や、カスティーリャ王国内への騎馬侵入による略奪によるものであるが、これは例外なく降伏によって解放された、といえる。但し、その場合に、身代金の支払いと引換に解放がなされている例—(3)(E)—もあるのが注目される。

〔 β 〕—これは〔 α 〕とは逆に、モーロ人が王国内に残留し、王権の支配に服した場合である。この場合は、征服された地域にそのまま居住する場合と、王国内の他地域へ移住する場合とがあった。但し後者の場合には、(7)のようにモーロ人の地との辺境は除外されているが、これは臣民となったモーロ人が敵方のモーロ人と内応することを防ぐためであろう。

ところで王権の支配に服すとは、「誠実なる良き臣民」となることであり、(7)に即してより具体的にいえば、国王の軍事指揮権、罰令権、課税権を認め、それに服することである。このうち課税権についていえば、モーロ人の負担が、旧支配者のモーロ人王の時代と同じ程度に抑えられていたことが留意さるべきである。

王国内残留のモーロ人に対しては、〔 α 〕と同じく生命・自由・財産が保証されている。生命・自由については〔 α 〕と同断だが、財産については〔 α 〕と異なり不動産も保証されることになる。この他、モーロ人には信仰の自由（イスラム教徒として留まることを許す）、裁判自治権（モーロ人裁判官によって裁かれる）、属人法主義（モーロ人はイスラム法によって裁かれる）が保証されている。

〔 $\alpha \cdot \beta$ 〕—これは特定の被征服地域のモーロ人の中に、王国外に退去する者と残留する者とが混在している場合である。両者に対する処遇は、夫々〔 α 〕、〔 β 〕の場合と殆ど同じであるから特に説明は不要であろうが、次のことを付言しておく。第一に、王国内残留といっても(16)、(21)のように市壁内居住は認められず郊外へ退去させられた例があること、第二に、(16)のように海岸近くの居住が禁止されている場合があるが、これは北アフリカのモーロ人との内通を防ぐためであろうことである。

〔 γ 〕—今までの三つの類型は、すべて生命・自由・財産が保証されている点で共通しているが、

〔 γ 〕の場合はモロ人が自由・財産を奪われ、捕虜となっている点で極立った例外を成している。(17), (18)は、何れもマラガ攻囲戦に関係しているから、結局かかる措置がとられた原因は、マラガ攻囲戦にある、といえよう。つまり、これが長期に亘り、モロ人側の抵抗が激しく、キリスト教徒側にも甚大な損害を与えたことが、かかる苛酷な扱いの原因であった、と考えられるのである。マラガの捕虜についてはラデーロ＝ケサーダの研究⁴¹⁾があり、これに拠って見ていくと、捕虜の数はミーハス、オスニーリャからの投降者 800 人を含めて、10,000人程度であり、内2,500～3,000人が従軍した貴族などの主要人物に分配され、教皇に 100人、ポルトガル王妃とナポリ王妃に夫々30人ずつ献上されている。残り 8,000 人程がキリスト教徒捕虜との交換用として国王の所有に帰したが、1487年 9 月 4 日のドルドックスとの取決めで、1人当り30ドブラの身代金を支払えば解放されることになり、2/3は60日以内に、残り 1/3は1488年 4 月と10月に半分ずつ支払うことになった⁴²⁾。捕虜は差当りセビーリャ、エシハ (Écija)、ヘレス＝デ＝ラ＝フロンテーラ (Jerez de la Frontera)、コルドバに分割されて運ばれ、内セビーリャには3074人が割当てられた⁴³⁾。結局身代金が支払われたのは僅かで、殆んどが奴隷として売却されたようで、セビーリャ、ヘレスで2440人、コルドバで470人、エシハで91人が売却されたことが判明している。

以上、降伏協定を四つの類型に分けて見てきたが、この違いはその後の統治とどう関わってくるのであろうか。〔 α 〕、〔 γ 〕の場合は、モロ人は国外に退去したり、捕虜として他の土地へ強制的に連行されたのであるから、征服地にモロ人は殆ど存在しないことになる。従って、武力征服の場合と同様に、王国のその他の地域での統治がそのまま拡張されるにすぎないことになり、殆ど問題はない。検討するべきは〔 β 〕、〔 $\alpha \cdot \beta$ 〕の場合であるが、これは降伏文書の現存する地域について見た後に、一括して検討することにしたい。

- 1) Palencia, I, 115a.
- 2) Bernáldez, LXVIII, 150.
- 3) 1483年12月30日付のフェルナンドの通達。原文は、*Mudéjares*, doc. 8.
- 4) Pulgar, III, XXXIII, 403a.
- 5) Palencia, IV, 122a.
- 6) Zurita, XX, LVIII, 472.
- 7) Palencia, IV, 132a.
- 8) Bernáldez, LXXIV, 155.
- 9) Historia, XXVIII, 242.
- 10) Zurita, XX, LX, 477.
- 11) Pulgar, III, XLIV, 419b-420a.
- 12) Palencia, V, 146a.
- 13) Bernáldez, LXXV, 160.
- 14) 1485年 7 月22日付のカトリック両王の王令。原文は、*Mudéjares*, doc. 12.
- 15) Palencia, V, 142b-143a.
- 16) Palencia, V, 143a.
- 17) Pulgar, III, XLV, 420b. 引用文中の Jaracuna の法は、本稿で後出するように xarasuna, xaraçina などの形で表われてくるが、或る説明には「神の意志に由来するムスリムの行動の規則」とあり (J. Moreno Casado, "Las capitulaciones de Granada en su aspecto jurídico", *Boletín de la Universidad de Granada*, 21, 1949, p.319), おそらく語形の類似からスンナ (sunna) と関連があるのではないかと推測されるが、筆者には判断がつかかねる。一応、大雑把にイスラム法と解しておく。
- 18) Pulgar, III, XLV, 421a.
- 19) Bernáldez, LXXV, 162.
- 20) Zurita, XX, LXII, 487.
- 21) Pulgar, III, XLVI, 423b.

- 22) Palencia, V, 147b. 23) Pulgar, III, XLVI, 423b.
 24) Pulgar, III, LI, 428b. 25) Historia, XXX, 246-247.
 26) Pulgar, III, LVIII, 436b. 呈示した部分の前にボアブディルの処遇に関する部分があるが、これについては別な史料に基づいて I で述べておいたので省略する。
 27) Palencia, VI, 165b. 28) Bernáldez, LXXIX, 168.
 29) Pulgar, III, LIX, 438b. 30) Pulgar, III, LXII, 440a.
 31) Pulgar, III, LXII, 441a. 32) Pulgar, III, LXIII, 453b.
 33) Palencia, VII, 181b-182a. 34) Palencia, VII, 196b.
 35) Bernáldez, LXXXV, 192. 36) Palencia, VII, 196.
 37) Palencia, VIII, 206b. 38) Pulgar, III, CV, 483b.
 39) Bernáldez, XCII, 206. 40) Pulgar, III, CXXIV, 502a.
 41) Ladero Quesada, "Las esclavitud por guerra a fines del siglo XV: El caso de Málaga", *Hispania*, 27, 1967.
 42) 原文は, CODOIN, VIII, 399-402; *Mudéjares*, doc. 15.
 43) *Mudéjares*, doc. 16.

III

降伏文書が現存しているのは七つの地域であるが、年代順にまず内容を整理していこう¹⁹⁾。

(1) コマーレス (1487年 5 月 4 日)²⁰⁾

全20箇条から成るが、主なものを4項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化。国王はモーロ人を臣民として受入れ、その保護下に置く (第1条)。

(B) モーロ人の義務と権利。①租税。曾てモーロ人王に負っていた以上の租税は徴収しない (第2条)。②夫役。城砦内での普請に労役を提供すること。そのための適当な日傭は支払う (第1条)。③宿舎提供。意志に反して、モーロ人の家にキリスト教徒を宿泊させるよう命じない (第8条)。④移住。最初の1年間に海外 (allende, アフリカ) への移住を望む者にはそれを許し、船舶を提供する (第4条)。カスティーリャ王国内の他地域への移住も許し、その場合に財産を売却できるが、王権の支配下にない地域へ移住する場合は全財産を失う (第6条)。⑤商取引。取引のためにモーロ人の地へ赴くことを禁ずる (第10条) が、王国内の土地であればどこにでも赴いて取引を行なうてよい (第11条)。

(C) 軍事。①城砦。すべての城砦・城堡を引渡すこと (第20条)。②捕虜。すべてのキリスト教徒捕虜を引渡すこと (第9条)。モーロ人の地から逃亡してきたキリスト教徒捕虜や、キリスト教徒の地から逃亡してきたモーロ人でこの町にいる者は、城代に引渡すこと (第12・16条)。③その他。武器をもって辺境に立入らぬこと (第14条)。グラナダ王国からのモーロ人の侵入に備えて、偵察兵 (atajadores), 見張兵 (guardas) を設けること (第19条)。

(D) 王権帰属財産。モーロ人王が所有していたすべての物件及び罰金収入 (penas y achaques) は王権に帰属する (第17条)。

(2) ウエスカル (1488年 6 月 25 日)²¹⁾

全16箇条から成るが、主なものを4項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化 (第1条)。

(B) モーロ人の義務と権利。①租税。モーロ人王に支払うことになっていた以上の租税を支払う必要はない (第4条)。②夫役。城砦の普請のために必要となったら、モーロ人は石工 (albañis), 人夫 (peones), 駄獣を提供すること。それに対して適正な日傭・賃銀が支払われる (第15条)。③所有。モーロ人の財産から何物も不当に取上げることとはしない (第1・6条)。④移住。王国内の何処へでも、また海外へも自由に移住でき、その際、動産から何物も取上げたり、差押えたりはしないが、不動産は王権乃至それが委託した者に帰属する (第8条)。⑤裁判。モーロ人がその慣習を守るよう命じ、カーディー、民政長官、ファキーフを残す。訴訟はカーディーの法廷において、彼らの法と xaraçunna に基づいて裁かれること (第6条)。⑥商取引。王権に帰属していないモーロ人と取引をしてはならず、彼らに糧食を与えてはならない (第10条)。王国内のどの市町村に商取引に赴いてもよいが、辺境では日没1時間前までに着き、日の出1時間以上後に出発すること (第11条)。

(C) 軍事。①捕虜。キリスト教徒の地から逃亡してきたモーロ人捕虜と、モーロ人の地から逃亡してきたキリスト教徒捕虜でこの町に来た者があれば、彼らを城代に引渡すこと (第14条)。②その他。モーロ人をその意志に反してグラナダ王国に対する戦争に召集することはない (第5条)。敵方のモーロ人が王国に侵入してきた場合には、城代に通報すること (第10条)。

(D) 王権帰属財産。王権の収入となるべきものを隠匿していた者は、7倍の罰金 (setenas) を支払うこと。モーロ人王に帰属していた物件・土地・罰金収入は王権に帰属する (第13条)。

(3) プルチェーナ (1489年12月7日)⁴⁾

全27箇条から成るが、主なものを4項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化 (第1条)。

(B) モーロ人の義務と権利。①租税。モーロ人王に負っていた以上の租税を徴収しない (第1条)。②夫役。適当な日傭・報酬を支払わずして、モーロ人やその駄獣が徴用されることはない (第19条)。③宿舍提供。モーロ人の家にキリスト教徒を強制的に宿泊させることはない (第21条)。④モーロ人マーク。この着用を強制しない (第23条)。⑤移住。アフリカへの移住を望む者は自由・安全に移住できる (第16条)。⑥信仰。モーロ人がその教えに生きることを妨げず、ムアッジン (almuedamas), メスキータ (algimas)⁵⁾, ファキーフを残すこと (第18条)。⑦裁判。モーロ人はその慣習に従い、xarasuna の法によって裁かれる (第18条)。キリスト教徒との裁判・争論はプルチェーナ城代とバーサの長官が裁く (第7条)。

(C) 軍事。①城砦。城砦を引渡すこと (第1条)。②捕虜。120人のキリスト教徒捕虜の解放の代償として、12,000レアル (reales) を与える (第14条)。③武器。馬・武器は奪われず、供出を要求されない (第22・24条) が、火器は引渡すこと (第20条)。

(D) モーロ人支配者層への特権授与。城代 Abrayn Abenidir は、全財産・家族・親族・使用人と共に海外に移住でき、その場合、全財産を売却しても、また代理人を残して収入を徴収させてもよ

い。また海外から戻ってきてもよく、その間、未売却の財産は免租となる(第3条)。ファキーフの Çaad Alpaltal も同様で、兩人及びその同道者に船舶を提供するよう命ずる。また彼らは、火器を除くすべての武器をもって移住できる(第4条)。プルチェーナの長官には、Abulfar Abenidir を充て、彼及び彼の選ぶ2家族は免租とする(第9条)。また彼には終身2万マラベディを恵与する(第10条)。

(4) アルムニェカル (1489年12月)⁶⁾

全4箇条から成るが、4項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化(第1条)。

(B) モーロ人の権利(第1条)。①人身・財産の保全。モーロ人の人身・財産は自由かつ安全である。②信仰。モーロ人がその教えに生きることを許し、メスキータ、ムアッジンを残す。③裁判。モーロ人は、カーディーの法廷で xaraçima の法によって裁かれる。

(C) 軍事(第1条)。①城砦。城代は最初の9日間以内に城砦を引渡すこと。②武器。火器を除き、馬・武器は没収しない。

(D) モーロ人支配者層への特権授与。城代に3,000ドブラを恵与する(第2条)。城代が海外への移住を望むなら、無償で船を供与する(第3条)。城代の動産・不動産は如何なる場所においても自由・安全であり、没収されることはなく、売却・質入・譲与・移動ができる。海外移住の場合に不動産を処分せずに行くときは、代理人を残して収入を徴収・送付させればよい(第4条)。

(5) アルメリーア (1490年2月11日)⁷⁾

全27箇条から成るが、3項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化(第1条)。

(B) モーロ人の義務と権利。①租税。モーロ人王に負っていた以上の租税は徴収しない(第6条)。②夫役。適当な報酬を支払うことなく、モーロ人やその駄獣を徴用することはない(第3条)。③宿舍提供。これを強制しない(第4条)。④供出。モーロ人の家から衣類を徴発しない(第4条)。⑤モーロ人マーク。この着用を強制しない(第8条)。⑥家屋・土地の所有保全(第1条)。⑦移住。海外移住は自由・安全に行なうことができ全財産の搬出か、その売却ができ、或いは代理人を残して収入を徴収させてもよい。一年以内に渡航する場合は、船を無償で供与する(第24条)。海外移住者でアルメリーアに財産を有する者は、3年以内に戻るか、財産を売却することができる(第18条)。⑧信仰。モーロ人はその教えに生きることを許され、他の教えに従うことを強制されず、ムアッジン、メスキータ、ファキーフは残し、メスキータには従前通りの収入が保証される(第2条)。キリスト教徒はメスキータに立入ってはならない(第22条)。⑨裁判。モーロ人の慣習に従い、カーディーの法廷で xaraçuna の法によって裁かれる(第2条)。

(C) 軍事。①捕虜。キリスト教徒の人質はモーロ人の人質と交換されるが、それ以外のキリスト教徒捕虜は引渡されること(第9条)。キリスト教徒の地から逃亡してきたモーロ人捕虜でバーサ、アルメリーア、グワディシュに來た者は自由である(第23条)。②武器。火器を除いて武器を取上げ

ない(第7条)。③戦利品。モーロ人が騎馬侵入によってキリスト教徒から奪った馬・武器・戦利品を没収しない(第13条)。

(D) モーロ人支配者層への特権授与。長官に対する免租特権と自由を守ること(第27条)。

(6) グラナーダ (1491年11月25日)⁸⁾

全43箇条から成るが、3項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化(第1条)。

(B) モーロ人の義務と権利。①租税。家・土地に関する税を3年間免除する(第9条)。②夫役。モーロ人やその駄獣を適当な日傭・賃銀なしに徴用しない(第11条)。③宿舍提供。これを強制しない(第16条)。④供出。衣類・家禽・駄獣を徴発せず、招宴を強要しないこと(第16条)。⑤所有の保全(第1条)。⑥移住。海外やその他どこへでも移住でき、誰にでも土地・動産・不動産を売却できる(第6条)。降伏後70日間は、海外移住のために10隻の船を用意する。3年間は無償で船を供与するが、以後は1人当たり1ドブラを徴収する。土地を売却できなかった者は代理人を残して、収入を徴収させてよい(第7条)。3年以内であれば海外から戻ってきて、この降伏協定の内容を享受できる(第26・28条)。⑦信仰。モーロ人がその教えに留まることを許し、メスキータ、鐘楼(zumaas)⁹⁾、ムアッジン、ムアッジンの塔[ミナレット]を残し、メスキータには従来通りの財産・収入を許す(第4条)。メスキータの収入や喜捨、学院の収入はファキーフが管理し、王権は介入しない(第20条)。改宗を強制しない(第32条)。キリスト教徒はモーロ人の教会に立入らぬこと(第12条)。⑧裁判。モーロ人は、その慣習に従い、カーディーの法廷によって、xaraçinaの法によって裁かれる(第4・15条)。キリスト教徒とモーロ人との争論はキリスト教徒のアルカルデとモーロ人のカーディーによって裁かれる(第42条)。⑨商取引。モーロ人商人は、アフリカへ商取引に赴いてよく、また王国内のすべての地方を自由に移動でき、キリスト教徒以上の関税、夜警免除税(rodas)、城主支配領域通行税(castillerías)¹⁰⁾を支払う必要はない(第29条)。

(C) 軍事。①城砦。60日以内に城砦を引渡すこと(第1条)。②捕虜。降伏後直ちに無償ですべてのキリスト教徒捕虜を引渡すこと(第10条)。逃亡してきたモーロ人捕虜でグラナーダにいる者は自由である(第24条)。人質を500人差出すこと(第1条)。キリスト教徒捕虜解放後2日目にモーロ人捕虜200人(内100人は人質)を解放する(第44条)。③武器。火器を除く武器や馬を奪わない(第5条)。④戦利品。戦争中モーロ人が奪った馬・家畜・衣類・金銀の返還を要求しない(第34条)。

(7) アルファカル (1491年12月22日)¹¹⁾

全9箇条より成るが、3項目に分類して見ていく。

(A) モーロ人の臣民化(第1条)。

(B) モーロ人の権利。①家屋・土地の保全(第1条)。②移住。海外への移住を許す。条件はグラナーダと同様(第2条)。王国内のどこへでも移住してよく、そのために財産を処分できる(第3条)。③信仰。モーロ人がその教えを守ることを許す(第1条)。④裁判。カーディーの法廷で、xaramaの法によって裁かれる(第1条)。⑤商取引。商品取引のために王国内を移動できる(第3条)。港で

の関税をキリスト教徒以上に支払う必要はない(第4条)。

(C) モーロ人支配者層への特権授与。カーディーの Aben Muçe と Ali Mocatil は、アルファカルの施政官 (alguaziles) となり、従来の如き特権・免租・自由を享受する(第9条)。

以上、7通の降伏文書を内容的整理を加えながら見てきたが、コマーレスとウエスカルの降伏文書には、(a) その他のものには見られない、或いは (b) それとは異なる条項が含まれている。(a)は、①商取引に関するもの—モーロ人の地へ赴くことの禁止(コマーレス第10条)、王国内の辺境の地域へ赴いた場合の発着時刻の制限(ウエスカル第11条)、と②軍事に関するもの—武器をもって辺境に立入ることの禁止(コマーレス第14条)、偵察兵・見張兵の設置(同第19条)、モーロ人侵入の場合の通報義務(ウエスカル第10条)であり、(b)は、③移住に関するもの—王権の支配下でない地域(第4条との関連からグラナダ王国を指すと考えられる)へ移住するモーロ人の全財産の喪失(コマーレス第6条)、移住先の如何を問わずモーロ人移住者の不動産の喪失(ウエスカル第8条)である。①はモーロ人の地や辺境が問題となっていることから推して、敵方のモーロ人との内応を警戒した措置であると思ふことができ、②と併せて軍事的な内容の条項といつてよいが、両者とも敵方のモーロ人が存在する場合に意味をもつ条項であるから、1492年のグラナダ王国の完全征服によって意味を失う。③は、海外移住の場合に全財産の処分を認めたアルメリーアや、移住先を問わず全財産の処分を認めたグラナダの降伏協定と比べると、著しく厳しい措置であるといえる。Ⅱの $[\alpha\beta]$ の場合には、移住の際の不動産に関する規定はとくに見られなかったが、ウエスカルの条項から見て、不動産の売却処分は許されず、王権に没収されたのではないかと推定される。コマーレスの場合は動産までも没収されるようになっており、事実上の移住禁止ともとれる措置がとられているが、何故コマーレスでⅡの $[\alpha\beta]$ やⅢの他の6例にも見られない厳しい措置がとられたのかは不明だが、一般的にはコマーレス、ウエスカルとアルメリーア、グラナダとの間の差違は降伏協定締結時点での戦況の差違から説明できるのではなからうか。すなわち、前者ではまだサガルが健在で未征服地域が残っていたのに対して、後者のアルメリーアではサガルが完全屈服し、同盟者ボアブディルが残るのみであったし、グラナダではボアブディルが完全屈服し、敵対するモーロ人が存在しなくなっていた。従ってまだ予断を許さぬ戦況にあった前者で、勝利の見通しがついたり、或いはそれが確定した後者よりも厳しい内容の降伏協定が結ばれたのである、と考えられる。以上の相違を除けば、7通の降伏文書の間に大きな矛盾はない、といえる。そこで、以下ではそれらの内容を項目別にまとめていきたい。

(A) モーロ人の臣民化。これはすべての文書にはほぼ同一の表現で表われてくる根幹的事項である。すなわち、国王はモーロ人をその「臣下・臣民 (vasallos y subditos) として、王権の保護と安全と庇護 (anparo e seguro e defendimiento) の下に受入れ」、逆にモーロ人は臣下の義務として「誠実と信義 (lealtad e fidelidad)」を順守する、というものである。

注意すべきは、王権とかかる臣従関係を直接に結んでいるのは、その地域の城代・長官・カーデ

ィー・ファキーフといったモーロ人支配者層であるということである。これらの支配者層の背後には勿論その地域のモーロ人全体が存在するが、降伏協定締結の当事者は支配者層であり、王権が臣民として直接的に把捉するのは、差当りは彼らのみである。

(B) モーロ人の義務と権利。モーロ人が王権の支配下に入れば両者の間には、当然のこととして、義務＝権利関係が生ずる。

まずモーロ人の義務について主なものを見ると、①租税②夫役③宿舎提供④供出⑤マーク着用があるが、①は期限付で一部が免除されるか、或いはモーロ人王に負っていたのと同様な負担を負えばよい、とされている。免租は、降伏を得るための譲歩であるとともに、戦火による耕地破壊などで事実上納付が困難であったという事情によるものであろう。②については、モーロ人またはその家畜をも含めて、強制的ではなく適正な賃銀の支払いを前提としてなされる、と定められている。③④⑤については、何れもそれが強制されることはない、とされているが、③④はおそらくキリスト教徒の駐留軍隊と関連している、と推測される。

次に権利については、①所有②移住③信仰④裁判⑤商取引、がある。①は家・土地などの不動産や動産を従来通り所有することを認め、戦利品として没収することはない、ということである。②は、海外（北アフリカ）のモーロ人支配地への移住を望む者にはこれを一定期間の間許し、船舶を無償で供与し、渡航前の全財産の売却、代理人を通しての残留財産からの収入取得、渡航後の一定期間内での帰国、これらを許可する、という内容である。なお、カスティーリャ王国内の他地域への移住も許されているが、この権利は、移住先での手厚い保護を期待できるモーロ人支配者層にとってのみ現実の意味のあるものであった、といえるのではあるまいか。③については、モーロ人にイスラム教の信仰が許され、メスキータ、ミナレットなどの宗教施設やそれに帰属する財産・収入の保全、ムアッジン、ファキーフなどの職務の存続、が認められている。④では、モーロ人がモーロ人の裁判官（カーディー）によって裁かれ、キリスト教徒との争論については、双方側の裁判官によって共同で裁かれるという裁判自治の原則と、*xarasuna* の法（イスラム法）に基づいて裁かれるという属人法主義の原則とが規定されている。⑤では、商取引のために王国内の如何なる所へも、またアフリカへ赴くことも許されている。

(C) 軍事。これは、①城砦②捕虜③武器④戦利品といった項目を含んでいる。①では、城砦などの軍事施設の引渡しを定めている。②については、キリスト教徒捕虜は例外なく解放されているが、有償の場合と無償の場合とがある。またキリスト教徒の支配地からの逃亡モーロ人捕虜は自由となる、とされている。③については、火器を除く武器と馬は没収されず、④については、モーロ人が戦争中に奪った戦利品は、返還を要求されないことになっている。

(D) 王権帰属財産。モーロ人王に帰属していた財産・収入は、王権が引継ぐことが謳ってある。

(E) モーロ人支配者層への特権授与。支配者層に対して、免租、年金恵与、下賜金などの優遇措置がとられ、また移住についても特別な便宜の図られている場合があるが、これらは降伏受諾の鍵を握る支配者層を懐柔するための方策であったといえよう。

以上、5項目に亘って7通の降伏文書について整理・検討してきたが、これらの降伏協定は、Ⅱで分類した類型から見ると、 $[\alpha \cdot \beta]$ に相当する、といってよい。既述のように、征服後の統治の特質を明らかにするためには、 $[\beta]$ と $[\alpha \cdot \beta]$ が検討対象となる必要があった。そこで最後に、Ⅱの $[\beta]$ 、 $[\alpha \cdot \beta]$ と、Ⅲの七つの事例とを素材として、征服後の統治の特質を考えてみたい。

- 1) これ以外に、レクリン谷のいくつかの町との降伏文書が現存しているが、これは以前に結ばれた協定の追加であるようで、内容的にも特に見るべきものがないので割愛する。この降伏文書の原文は、*Mudéjares*, doc. 47.
- 2) *Mudéjares*, doc. 14.
- 3) *Capitulaciones*, doc. VIII.
- 4) CODOIN, VIII, 403-407; *Mudéjares*, doc. 27.
- 5) *algima* は、*aljama* であり、これはメスキータ (*mezquita*) と同義である。cf. Moreno Casado, *art. cit.*, p.315.
- 6) *Capitulaciones*, doc. XVII; *Mudéjares*, doc. 31.
- 7) CODOIN, XI, 475-479; *Mudéjares*, doc. 34.
- 8) CODOIN, VIII, 421-436; *Mudéjares*, doc. 50; *Capitulaciones*, doc. LX. 前二者は Simancas 文書館所蔵の原文に拠っており、*Capitulaciones* は、これとコルベラ (Corvera) 侯がグラナダ市参事会に与えた1492年12月30日付の特権付与状とを対比的に活字化している。両者間の主な違いは、前者の第37条が後者に欠如していること、後者に9箇条の追加条項 (但し追加第9条は、前者の第43条にあたる) があること、である。追加条項は、モロ人を戦争に召集しないこと、用水堀 (*acequias*) を維持してよいこと、モロ人に関する事項を扱う民政官はモロ人たること、などの条項から成る。なお、降伏協定各箇条の解釈については、Moreno Casado, *art. cit.* が有益である。
- 9) *Ibid.*, p.315 に *zumaa*=*campanario* とある。
- 10) cf. *ibid.*, p.318, ns. 43, 44.
- 11) *Capitulaciones*, doc. LXV; *Mudéjares*, doc. 51.

Ⅳ

$[\beta]$ 、 $[\alpha \cdot \beta]$ の内容とⅢの七つの事例とを比較すると、前者の殆どすべてに含まれていた国王の軍事指揮権と罰令権への服従規定が、後者には明示されていないことが判る。しかし、後者にも「誠実なる良き臣下が〔国王に〕負っているすべての事を遂行すべし」(グラナダ第1条)といった規定はあり、前者の服従規定も当然この中に含意されていた、といって差支えあるまい。次に前者では市壁外への退去が命じられている場合 (ベレス=マラガ、バーサ) があったが、後者にはかかる明示的な規定はない。後者のうちで、居住場所について示唆を与えるのは3例であり、アルムニェカルではモロ人が「その家に住むがままにし」(第1条)、アルメリーアでは「その家と農地に住むがままにし」(第1条)、グラナダでは「その家・農地・動産・不動産を所有し続けさせる」(第1条)とされており、何れも征服時に居住していた家にそのまま居住することが許される、と読取れる表現になっており、これら3例から窺われる限りでは、市壁外への退去はなされなかったものと推察される。しかし、市壁外、市壁内の何れであっても、その地に残留するという基本点においては変わりはない。

以上の2点を除けば、 $[\beta]$ 、 $[\alpha \cdot \beta]$ の内容はⅢの七つの事例にほぼすべて包摂されるといってよい。従って征服時の統治の性格を明らかにするためには、結局、Ⅲの七つの事例を素材とすればよいことが判明する。そこでⅢで(A)～(E)にまとめた内容に沿って検討していく。

(A)については既述のように、国王との臣従関係が何よりもモーロ人支配者層との間で結ばれていることが重要である。その他のモーロ人に対して直接的に王権の支配が及ぶことはない。勿論、彼らが王権の支配下にあることは事実なのだが、彼らに対する支配は、モーロ人支配者層を媒介とした間接的なものなのである。

(B)は民政的分野でのモーロ人に対する処遇を定めたものであり、最も重要な項目である。まず、これらの内容が全体的に見てモーロ人にとって極めて寛大なものであったと、評価することに異論の余地はなかろう。かかる一般的特徴を確認した上で個別に見ていくと、まず移住については、それに伴う財産処分、代理人を通しての残留財産の収入取得、移住後の帰国を夫々承認し、その他船舶の無償供与など手厚い措置がとられているが、これらは期限付のものが多く、戦後処理の一環としての性格が強いので、征服後の統治の特質とは余り関わりはない。

そこで、それ以外の面について見ると、所有の保全、従来と同じ税負担、信仰の自由、裁判自治の原則、属人法主義の適用など、モーロ人の征服前の制度・生活をそのまま維持しようとする傾向が顕著であることが注目される。

(C)は戦後処理的内容の短期間に関わるにすぎないものが多いが、武器の問題は、火器を除くという制限付ではあるものの降伏者の武装権を承認しており、長期間に関わる問題となっている。かかる措置は、敗者に対する措置としては、甚だ寛大なものである、といってよかろう。

(D)は従来モーロ人王が占めていた地位にカトリック両王がとって代わったことを端的に示している。

(E)はモーロ人支配者層に対する優遇措置であり、王権の支配の媒介者としての彼らの地位に即応したものである。

以上から、降伏協定から帰結する王権のモーロ人支配の特質は、モーロ人王にとって代わった王権が、旧来のモーロ人の制度・生活を殆どそのまま存続させながら、モーロ人支配者層を媒介としてその支配を貫徹していく、という点にあった、といってよかろう。そしてその支配の基調は著しく寛大なものであったのである。

ところで、モーロ人の居住している地域には、征服者のスペイン人が駐留し、やがて所謂「再植民」(repoblación)によって、スペイン人の入植が行なわれていく。これらのスペイン人に対する王権の支配は、王国の他の地域と本質的には異なる所がない。だとすれば、かかる地域における王権の支配は、スペイン人とモーロ人の夫々に対する異質の支配原理から成る二元的構造をもっていた、といえよう。

スペイン人とモーロ人、キリスト教とイスラム教、スペイン法とイスラム法の共存といった人種的・宗教的・法的二元主義こそ征服後の旧グラナダ王国の基本的性格なのであり、それは降伏協

定によってもたらされたものなのである。

〔付記〕 本稿は、昭和58年度文部省科学研究費・奨励研究(A)による研究成果の一部である。